

宗教の知識経営論

On the Knowledge Management of Religion

岩井 洋*

Hiroshi IWAI

抄 録

本稿は、知識経営あるいは知識創造の視点から、宗教システムの運営について分析する試みである。まず、知識経営論について紹介し、本稿の分析枠組を明確化する。次に、その分析枠組にもとづき、徒弟制の視点から、宗教システムにおける知識の共有と創造について考察する。そして最後に、秘密が宗教システムのなかで果たす役割と、秘密のマネジメントに関する仮説を提示する。

1. はじめに

本稿は、知識経営の視点から宗教現象を分析する試みである。

「知識経営」とは、後に詳述するが、「知識にもとづく経営、つまり戦略・組織・事業など、経営のあらゆる側面を知識という目でとらえ実践する考え方」¹⁾である。「経営」という言葉は、しばしば「金儲け」(＝営利活動)と同義に使われる。しかし、その起源をさかのぼれば、日置が指摘するように、「社会システムの運営」を意味した²⁾。したがって、経営学は社会システムの運営に関する学問であり、今日のような企業経営をおもな対象とする経営学は、本来の意味からすれば、きわめて限られた対象のみをみついていることになる。経営学の研究対象を宗教現象にまで広げた場合、宗教システムの運営を研究する学問として、「宗教経営学」³⁾が成立することになる。その意味で、本稿は宗教経営学の試みであるともいえる。

さて、知識という主題に関して、従来の宗教研究は、聖職者内部における宗教的知識の伝達や民俗知識としての宗教的知識の伝達などを、おもな対象としてきた⁴⁾。しかし、宗教現象における知識のあり方を一般化する試みは、未発達であるといえる。そこで、本稿では、昨今の経営学における知識経営の議論を援用しつつ、宗教システムがいかにかに運営されているかを、知識に焦点をあてて分析し、その一般化を試みたい。なお、研究対象としては、特定の宗教・教派・教団に限定せず、宗教現象一般を広くあつかうが、宗教システムの運営という観点から、組織の輪郭が比較的明確な宗教現象をあつかう。

* 関西国際大学人間学部

議論の手順としては、第一に、おもに経営学の分野で展開してきた知識経営論について紹介し、本稿の視点を明確にする。第二に、知識経営論だけではなく、認知心理学や教育人類学の分野でも注目されている徒弟制に着目し、宗教システムにおける知識の共有と創造を徒弟制の視点からとらえなおす。そして最後に、特定の人間にもみ保有権あるいはアクセス権がある知識や技能を「秘密」として読みかえ、秘密が宗教システムのなかで果たす役割と、そのマネジメントについて論じる。

2. 知識経営とはなにか？

「知識経営」とは、Knowledge Management の翻訳であり、昨今では「ナレッジマネジメント」と表記されることが多い⁵⁾。しかし、一般にナレッジマネジメントとしてイメージされているものは、野中と紺野⁶⁾が指摘するように、企業内におけるベストプラクティスの共有や形式的な知識の活用という側面が強い。つまり、われわれの「頭の中にある」知識というよりも、文書化されたノウハウや専門的知識などを、コンピュータネットワークで利用しようとするものであり、これは、従来の情報システムの応用の域をでない「知識管理」と呼んだほうがよい。

野中と紺野は、上記の意味でのナレッジマネジメントを狭義の Knowledge Management と位置づけ、広義のものを「知識経営」と呼び、以下のように定義する。すなわち、「知識の創造、浸透(共有・移転)、活用のプロセスから生み出される価値を最大限に発揮させるための、プロセスのデザイン、資産の整備、環境の整備、それらを導くビジョンとリーダーシップ」⁷⁾である。この定義には明示的に表現されていないが、知識経営の本質は、形式知と暗黙知のダイナミックな相互作用と、それによる知識の創造にあるといってもよい。形式知とは、言葉や文章などで明示的に表現された種類の知識であり、前述の意味でのナレッジマネジメントが対象としていた知識である。これに対して、暗黙知とは、言葉や文章で表すのが難しい主観的で身体的な知識である⁸⁾。暗黙知には、自転車を運転する技術にはじまって、経験によって得られたセールスマンの営業感覚や熟練工の技能まで、さまざまなものが含まれる。

野中は、形式知と暗黙知の相互作用からなる知識創造のモデルを提示した⁹⁾。そのモデルは、以下の四つのプロセスからなり、「SECIモデル」と呼ばれる。

- (1) 共同化 (socialization) = 個人の暗黙知からグループの暗黙知を創造するプロセス。
- (2) 表出化 (externalization) = 暗黙知から形式知を創造するプロセス。
- (3) 連結化 (combination) = 個別の形式知から体系的な形式知を創造するプロセス。
- (4) 内面化 (internalization) = 形式知から暗黙知を創造するプロセス。

「共同化」は、経験を共有することで、技能などの暗黙知を創造するプロセスで、ビジネスにおける OJT(on-the-job training) や、修行中の弟子が、言葉によらずに、観察・模倣・練習を通して、師匠から技能を学ぶことなどは、その例である。「表出化」は、個人のなかにある暗黙知を、比喻・コンセプト・仮説・モデルなどの、共有できる形式知に変換するプロセスである。組織内においては、おもに対話によって表出化が行われる。「連結化」¹⁰⁾は、表出化された形式知を組み合わせることで、新たな形式知を創造するプロセスである。教育機関における教育や訓練などは、その典型例である。

最後の「内面化」は、組織的に形式化された知識を、暗黙知として自分のなかに取り入れるプロセスである。そこでは、行動や実践、シミュレーションや実験を通じて、知識が身体化されるのである。野中¹¹⁾によると、これら四つのプロセスはスパイラル状に展開していくという。

野中らによる知識経営論あるいは知識創造論は、企業組織をおもな対象とし、創造的な商品開発や企業革新のプロセスを描き出すのに成功した¹²⁾。しかし、そのモデルは企業組織以外の分析にも適用可能である。とりわけ、形式知と暗黙知の相互作用という概念は、宗教システムの分析にも有効であると考えられる。そこで、次節では、知識経営論あるいは知識創造論を援用し、徒弟制の視点から、宗教システムにおける知識の共有と創造について分析する。

3. 徒弟制からみた宗教

「徒弟制」(apprenticeship)とは、一般に、前近代(前工業)社会において、特定の技能を修得するための修行が、労働と一体化しているような制度をいう¹³⁾。伝統的な職人、芸能組織や相撲部屋などは、その典型といえる。

徒弟制では、特定の技能をもった親方に、その技能の習得をめざす者が弟子入りし、長期の共同生活をしながら、技能を習得していく。しかし、現実には、親方-弟子の二項図式ではなく、兄弟子-弟弟子といった関係を含む、複雑な階層構造がみられる。また、技能の習得においても、単純な教授-学習という関係ではない。「芸は教えるものではなく、弟子が自ら盗むものである」といわれるように、親方は技能を秘匿することも多い¹⁴⁾。そして、何よりも徒弟制の特徴といえるのは、福島が指摘するように、「実際にやってみること」である¹⁵⁾。理論的に考えれば、技能の習得過程を明示化し、マニュアル化したほうが効率的であると考えられる。しかし、現実のタスクは複雑な構造をもっており、実際にやってみるほかない。たとえば、一見単純に見える旋盤工の仕事も、現実には、複雑な技能習得のための段階を必要とする。このことは、福島がいうように、「学習の空洞化に悩む教育学者に一種のインスピレーションを与えた……つまりマニュアル化の欠陥を山のように見てきて、結局具体的な労働過程の複雑さをあらためて発見したわけで、じつは学習の構造もそうした具体的な労働過程に密接に関連すべきであるというように思いこむようになった」¹⁶⁾と考えられる。このような理由から、一見、前近代的あるいは封建遺制にみえる徒弟制が、認知心理学や教育人類学の分野で、学校教育を相対化する新たな学習モデルとして注目されている¹⁷⁾。

レイブとウェンガーは、徒弟制をヒントに、学習の概念を再定式化した¹⁸⁾。彼らによると、学習とは実践的な活動やなんらかの共同作業に参加することであるという。そして、学習者が参加する「場」を「実践共同体」(community of practice)と名づけた。そこでは、実践(活動)に参加するメンバー同士の関係が構造化され、実践に密接に関連するハードウェア(道具立てや空間的配置)が存在する。実践共同体において、新参者は周辺参加からはじまって、徐々に共同体の中心へとむかい、十全な参加者になっていく。

さて、実践共同体の概念は、宗教システムにおける知識や技能の伝達を分析する際にも応用できる。通常、宗教における修行は、宗教的共同体への参加からはじまる。最初は新参の入信者であり、教祖、

教師や先輩の信者からなる階層構造の周辺からはじまって、信仰や教義に対する理解を深めるとともに、宗教実践を積み重ね、徐々に共同体の中心へとむかっていく。このプロセスは、徒弟制や実践共同体の概念と共通する。さらに、宗教的共同体における諸実践は、前述の知識経営論あるいは知識創造論のプロセスとも共通する。

宗教における教義は形式化された知識であるが、その教えを実践すること自体は、暗黙知に頼らざるをえない。礼拝方法や儀礼における所作、発声方法、儀礼道具の使い方などは、ある程度のマニュアル化は可能でも、現実には、「実際にやってみること」から学ぶことになる。これらのプロセスを、前述の SECI モデルに沿って説明するならば、次のようになる。まず、「実際にやってみること」から暗黙知が共有され(共同化)、それを言語化することで形式知が生まれる(表出化)。そして、形式化された知識群を調整していくことで、教えが形づくられる(連結化)。さらに、それを身体的に実践していくことで、教えが暗黙知として内面化される。

これらのプロセスを考察するとき、参考となるのが島菌の「体験主義」という概念¹⁹⁾である。島菌によると、「宗教的体験主義とは、宗教的信念の核心的内容や主たる拠り所を救いや回心や神秘現象の目撃や至高の心身状態などの個々人の体験に求める思想」²⁰⁾であるという。簡単にいえば、体験から学ぶことと、個々人の体験を重視する宗教的な傾向であるといってもよい。

島菌は、昭和前期に形成された新宗教教団である霊友会の事例を分析しているが、興味深いのは、信者同士が宗教体験を語る、体験談という宗教実践である²¹⁾。個人の宗教体験を語ることは、信仰の確立と信者としてのアイデンティティの確立に役立つといえる。信者が、個人にしか感得しえない宗教体験を言語化し、体験談として報告する行為は、前述の SECI モデルにおける表出化のプロセスといえる。また、複数の信者による体験談の相互理解は、連結化のプロセスに相当する。ただし、霊友会の場合、「信仰を体験によって弁証しようとする体験談的な宗教言語が発達した反面、信仰を合理的に説明しようとする教義的な宗教言語が未発達」で、「教義の体系化が進められず、教義学習のシステムが制度化されることがなかった」という²²⁾。

とはいえ、体験談を語るという実践には、体験談の相互理解にもとづく物語の共同制作と、当該教団に特有のジャーゴン(専門用語)の習得という、ふたつの重要な要素がビルトインされているとも考えられる²³⁾。前者に関しては、さまざまな新宗教教団の体験談を総合的にみると、自己の体験を教祖の体験になぞらえて語る場合や、体験談の語り口(プロット)に一定のパターンがみられることが多い。このことは、体験談の内容や筋書きが、体験談の語り合いという共同作業を通して、定式化していくことをしめしている。また、ジャーゴンの習得に関しては、次のようにいうことができる。信者は、他者の体験談を通して、ジャーゴンの語法と意味内容を学習し、今度は、そのジャーゴンを使用して、自己の体験を説明しようとする。このような繰り返しのなかで、ジャーゴンが習得されるといえる。このプロセスには、内面化と表出化が複雑に入れこまれている。

このように、宗教における実践は、実践共同体への参加と「実際にやってみること」からはじまる。そして、その過程で、SECI モデルにおける四つのプロセスが、スパイラル状に展開していくといえる。

さて、徒弟制という観点から宗教システムをみる場合、いまひとつ重要な論点は、徒弟制の特徴の

ひとつとしてふれた、技能の「秘匿」である。このことは、次節で論じる秘密のマネジメントと密接に関わる。

福島は、とりわけ芸能組織において、親方が権威を維持するための独特な戦略として、「積極的秘匿」とでも呼べる教授法があるという²⁴⁾。つまり、中心的な技能をわざと教えないということである。たとえば、陶芸の親方は、物見遊山の客には、壺の作り方を懇切丁寧に口頭で教えるのに対して、陶芸を真剣に学ぼうとする新人には、教えることを拒否するという態度をとる。そうなれば、新人たちは、いやがうえにも技能を「盗む」しかなくなる。つまり、徒弟制において、技能を誰にでも公開すべきではないという発想がある裏には、「たくまざる学習（侵犯？）への動機づけという機能が潜伏している」²⁵⁾のである。さらに、積極的秘匿には、技能の革新という隠れた仕掛けもある²⁶⁾。つまり、技能が秘匿され、技能の最終到達点も明確に示されないとするれば、親方の技能を完全に模倣することは不可能である。そうなれば、そこに技能の革新や創造の余地が生まれることになる。つまり、「芸を盗む」ことには、創造性への契機がビルトインされているとあってよい²⁷⁾。

積極的秘匿という概念は、宗教システムにも応用することができる。宗教の場合、宗教的技能や「秘儀」として一般には公開されず、信者の修行の深度に応じて、段階的に技能が開示されることが多い。したがって、そこに儀礼の革新や教義に対する新たな解釈が生まれる余地がある。

4. 秘密のマネジメント

最後に本節では、秘匿の問題を「秘密のマネジメント」という観点から考察する。

綾部は、秘密結社の研究において、人類における秘密の根源性について、次のようにいう。

「未開、文明を問わず、公私ともに、人間の社会生活に秘密の存在しなかったことはかつてなかったし、現在もなおないだろう。棲家や獲物を隠すという意味での、動物の本能的秘密志向を別とすれば、知的レベルでの秘密は人間とともに誕生し、人間の歴史とともに歩んできたと言って差し支えない。個人としては、自我の発生とともに『秘密』は誕生し、集団としては、血縁や地縁以外の結合原理の登場とともに、秘密結社的集団が芽生えたものと考えらるべきであろう」²⁸⁾。

古今東西の宗教をみても、秘密は、多かれ少なかれ、どの宗教にも存在する²⁹⁾。ここでいう「秘密」とは、聖典に隠された秘密や、特定の個人のみが保有する知識や技能（霊能力など）をさす。多くの宗教においては、一般信者の秘密へのアクセスが限定され、宗教指導者の秘密が神秘化される傾向がある。

では、なぜ秘密が宗教において重要な意味をもつのか？ その理由として、以下の二つが考えられる。ひとつは、特定の個人のみが保有する知識や技能を確保することで、教祖や聖職者の権威を正当化するとともに、その地位を保護しようとするためである。いまひとつは、秘密を段階的に開示することによって、信者の修行に対するモチベーションを高めようとするためである。

第二の点については、すでにふれたように、徒弟制における技能の秘匿が、弟子の学習への動機づけを促進するという議論と、構造的には同じである。第一の点については、特定の知識の保持が、社会内部における階層化とむすびつくことを考えればよい。シュッツが指摘するように、あらゆる知識

は、社会の全成員に均等に割り当てられているわけではない³⁰⁾。このことを理解するのに、多くの事例は必要ない。政府高官は、一般国民が知りえない情報を知っているし、高度な技術をもつ職人は、他の人々にはほとんど必要がないような、高度な技術的知識をもっているだろう。このように、知識は、常にわれわれの関心や社会的地位に応じて、不均等に配分されている。そして、どのような知識を保有するかが、個人の社会的地位や社会階層と連動する傾向がある³¹⁾。

このように考えると、秘密は一種の「資本」(capital)として機能するといえる。つまり、資本である秘密をより多く保有することは、社会的優位性を保有することにつながるわけである。ただし、資本の概念を拡張し、社会学に導入したブルデューが指摘するように、資本が資本として機能するためには、その資本が有効な「場」(champ)が必要となる³²⁾。さらに、なにが資本たりえるかは、その場との関係によって規定される。たとえば、フランス人が学校でラテン語(あるいは日本人が漢文)を教えなくなったとすると、ラテン語(あるいは漢文)の教授能力がある者は、その知識を発揮するための市場がなくなり、かつて「資本」であったものも、ひとつの「所有物」にすぎなくなってしまうのである。

さて、教祖や聖職者が秘密を保持し、自己の地位を保護する具体的な戦略は、二通り考えられる。それは、儀礼の複雑化と聖職者養成機関の設立である。前者は、教祖や聖職者が執行していた儀礼の手順や細部を複雑化することにより、簡単に模倣できないようにすることである。後者は、神学校やそれに類する聖職者養成機関を設立し、専門教育を受けなければ、特定の知識や技能を習得できない仕組みをつくることである。

このような戦略が、教祖や聖職者の地位保全という意味において、ある程度の成功をおさめてきたことは、世界の宗教史が証明している。ただし、秘密の隠蔽が過度になると、宗教的指導者の権威が肥大化し、一般信者からの支持を失う危険性も生じる。そこで考えられるのが、権威の委譲や分散、秘密の部分的・段階的な開示である。修行しだいで、霊能力をはじめとする宗教的な力が習得できるというシステムは、信者に大きな動機づけとなる。

ところが、たとえ段階的な秘密の開示であれ、あまりに多くの信者が、ある一定レベルの秘密を手に入れるようになると、今度は「霊能のインフレーション」とでも呼べる現象が起こることになる。経済学の需要・供給曲線をもちだすまでもなく、限られた者だけがもつ知識や技能こそ、宗教「市場」における「資本」たりえるのである。したがって、「インフレーション」が起これば、個々の秘密の価値が低下する³³⁾。

このような事態に対して、しばしばとられる方策は、修行の内容や段階を明確化し、かつ修行を厳格化することによって、霊能者の増殖を抑制することである。川端による真如苑の研究³⁴⁾は、霊能のインフレーションとその抑制に関して、ひとつのヒントをあたえてくれる。真如苑は、霊能者の育成と霊能による救済をめざす新宗教教団であり、信仰のランクづけ(「霊位」という)を四段階に分けている。入信者が修行をつづけ、最高の霊位である「霊能」にいたるまでには、通常、十数年を要するという。真如苑は、1970年代後半から信者数を増やし、80年代に急増した。川端によると、信者の急増するにつれ、入信から「霊能」にいたるまでの年数も増加しているという。この背景には、信者の年齢構成の変化もあったが、霊位向上のための修行機会を無条件にあたえるのではなく、霊位向

上を期待できる信者に多くの修行機会をあたえるという、能力主義の導入もあったと考えられる。

これまで述べてきたように、宗教システムをうまく運営するためには、秘密の開示と隠蔽をバランスよく行なう必要があることが理解できる³⁵⁾。しかし、インターネットの普及により、宗教システムにおける秘密のマネジメントが、新たな局面をむかえた。このことについて、最後にふれておきたい。

インターネットの普及により、専門的かつ特殊な情報でさえも、特定の階層や職業、組織の成員などに、独占的に利用されえなくなり、「研究者よりもその専門的事項に詳しい人の出現が容易になる。ごく普通の生活をしている人が、専門の宗教家よりも豊かな宗教情報をもつといったことは別段不思議ではなくなってきた」³⁶⁾。井上は、これを「専門知の逆転現象」³⁷⁾と呼んだ。このような現象に加えて、宗教的な秘密が、インターネットを通して流出するという出来事もおこっている。たとえば、アメリカではサイエントロジーの元信者が、かなりの修行を経ないと入手できない秘密を、インターネット上に流し、それが訴訟問題にまで発展した³⁸⁾。弁護士の紀藤が指摘するように、インターネットの普及により、もはや教義の一元管理が不可能になり、秘密の儀式や秘密のセミナーの内容が、インターネット上に公開される可能性が高くなっている³⁹⁾。

5. むすび

本稿では、知識経営あるいは知識創造という観点から、宗教システムの運営について考察した。そして、形式知と暗黙知とのダイナミックな相互作用という知識創造のモデルや徒弟制研究の枠組みが、宗教システムの運営に関する分析にも応用できることを示した。さらに、徒弟制の特徴のひとつである技能の秘匿に着目し、これを「秘密のマネジメント」として読みかえて、宗教システムの運営について分析した。そこで明らかになったのは、秘密の開示と隠蔽の巧みなバランスが、信者の動機づけやシステムの運営を左右することを示した。

しかし、インターネットの普及により、従来型の秘密のマネジメントが、通用しなくなってきたことも明らかになった。ネットワーク社会と宗教システムにおける秘密のマネジメントについては、今後の課題とし、稿を改めて論じたい。

注

- 1) 野中郁次郎・紺野登『知識経営のすすめ：ナレッジマネジメントとその時代』筑摩書房 1999 45 頁
- 2) 日置弘一郎『経営学原理』エコノミスト社 2000。日置によると、現在の経営学の起源は、ドイツ家政学にまでさかのぼるといふ。ただし、「家政学」といっても、アメリカで成立した家政学(home economics)とは異なり、それは、ヨーロッパ中世における荘園管理の学問を基盤としているという。なお、経営という概念を考える際、日置や中牧らによる経営人類学的研究も参考になる。日置弘一郎『文明の装置としての企業』有斐閣 1994、中牧弘允・日置弘一郎『経営人類学ことはじめ：会社とサラリーマン』東方出版 1997
- 3) 「宗教経営学」を標榜するものとしては、舘澤貢次『宗教経営学』双葉社 2004 がある。しかし、これは新宗教教団を営利的なビジネスとしてみた、ジャーナリスティックなものである。また、

- いくぶんジャーナリスティックではあるが、宗教集団の本質を組織論的に分析したものとして、小田晋『宗教集団に学ぶ企業戦略』はまの出版 1990 がある。なお、宗教経営学の試みについては、筆者の以下の論考を参照。岩井洋「宗教の遠心力と求心力に関する試論」『宗教と社会』9 2003 3-20 頁, 同『目からウロコの宗教：人はなぜ「神」を求めるのか』PHP 研究所 2003, 同「宗教経営学からみた世界救世教：分派発生と霊能のインフレーション」『韓日宗教研究国際学術シンポジウムⅡ（世界救世教編）』（報告論文）2004 17-19 頁（韓国語）、42-44 頁（日本語）
- 4) 渡辺欣雄『新版・民俗知識論の課題：沖縄の知識人類学』凱風社 2004, 杉本良男編『伝統宗教と知識』（南山大学人類学研究所叢書Ⅳ）南山大学人類学研究所 1991 などを参照。
 - 5) ナレッジマネジメントがアメリカで流行した背景については、野中・紺野 前掲書 第1章を参照。
 - 6) 同書 52 頁
 - 7) 同書 53 頁
 - 8) マイケル・ポランニー『暗黙知の次元』（佐藤敬三訳）紀伊國屋書店 1980。「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」（同書 15 頁）というポランニーの言葉は、しばしば引用される。
 - 9) 野中郁次郎・竹内弘高『知識創造企業』（梅本勝博訳）東洋経済新聞社 1996 91-109 頁
 - 10) 野中・紺野 前掲書では「結合化」と表現されている。
 - 11) 野中・竹内 前掲書 105-109 頁
 - 12) 野中・竹内 前掲書では、松下電器の家庭用自動パン焼き器「ホームベーカリー」の開発や、日産のプリメーラ・プロジェクト、新キャタピラー三菱の REGA プロジェクトなどの事例が紹介されている。
 - 13) 徒弟制に関する議論については、以下の文献を参照。福島真人編『身体の構築学：社会的学習過程としての身体技法』ひつじ書房 1995, 同編『暗黙知の解剖：認知と社会のインターフェイス』金子書房 2001, ジーン・レイブ&エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』（佐伯胖訳）産業図書 1993, Michael W. Coy(ed.), *Apprenticeship: from theory to method and back again*, NY: State Univ. of New York Press, 1989, John Singleton(ed.), *Learning in Likely Places: Varieties of Apprenticeship in Japan*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1998
 - 14) 福島によれば、このような秘匿は、「その技能を教えることが、長期的にはその技術の拡散による競争相手の出現によって、自らの首を締めることにもなるという、ある種の警戒感がある場合もあれば、独特な教授論的な戦略によって、いわば弟子を『じらす』という場合もある」という。福島『暗黙知の解剖』 71 頁
 - 15) 同書 72-73 頁
 - 16) 同書 73 頁
 - 17) しかし、もともと技能習得への動機づけがある徒弟制と、動機のない生徒を動機づけることをめざす学校教育との違いがあると同時に、生活全般にわたる全人格的な参加を求められる徒弟制と、参加が細分化された学校教育とは、根本的に異なる。福島 同書 85-86 頁

- 18) レイブ&ウェンガー 前掲書。彼らは、メキシコ・マヤ族の産婆、リベリアの仕立て屋、アメリカ海軍の操舵手、アメリカのスーパーの肉屋、断酒中のアルコール依存症者たちを例に、議論を展開している。
- 19) 島菌進「新宗教の体験主義：初期霊友会の場合」村上重良編『民衆と社会：変革の理念と世俗の倫理』（大系：仏教と日本人 10）春秋社 1988 277 - 326 頁
- 20) 同論文 279 頁
- 21) 島菌によると、創価学会の座談会や立正佼成会の法座にみられる、体験にもとづく小グループでの語り合いは、昭和 10 年代の中頃に定式化したという。同論文 326 頁。なお、新宗教教団における体験談の位置づけについては、島菌進「宗教言語としての体験談：霊友会系教団を例として」『東京外国語大学海外事情研究所研究報告』34 1986、同「新宗教教団における体験談の位置：妙智會・立正佼成会・天理教」『東京大学宗教学年報』2 1985 などを参照。
- 22) 島菌「新宗教の体験主義」302 頁
- 23) 菊池裕生「物語られる自己 (self) と『体験談』分析：真如苑『青年部弁論大会』のコンテクストに着目して」大谷栄一・川又俊則・菊池裕生編『構築される信念：宗教社会学のアクチュアリティを求めて』ハーベスト社 2000 を参照。
- 24) 福島編 前掲書 38 - 42 頁
- 25) 同書 41 頁
- 26) 同書 41 - 42 頁
- 27) 鶴見は、「型破りと型外れ」という短いエッセイのなかで、このことを巧みに表現している。「型を厳しく訓練し、伝承するのは、型そのものの保守が目標であるよりもむしろ、型をきびしく伝承することをとおして、いくばくかのものが、やがてはその型を踏み破り、踏み越えてゆくであろうことが、欣求されている」「新しい型の創造は、型外れによってではなく、型をもっともよく身につけたものによってのみ、型破られる」鶴見和子「型破りと型外れ」『鶴見和子曼荼羅』（VII 華の巻）藤原書店 1998 439 頁。
- 28) 綾部恒雄『秘密の人類学』アカデミア出版会 1988 8 - 9 頁
- 29) 秘密に関する社会学的考察については、ジンメルの先駆的研究がある。G・ジンメル『秘密の社会学』（居安正訳）世界思想社 1979 および菅野仁『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会 2003 を参照。
- 30) A・シュッツ『現象学的社会学の応用』（桜井厚訳）御茶の水書房 1997 の第 3 章「博識の市民：知識の社会的配分に関する小論」を参照。
- 31) 宗教研究における「民俗宗教」や「民衆宗教」と呼ばれるものに関する議論は、知識の社会的配分という観点からも考察する必要がある。しばしばいわれる「エリートの宗教／民衆の宗教」あるいは「聖職者の宗教／民衆の宗教」などという区分は、まさに知識の社会的配分と密接に関係する。
- 32) ブルデューの資本概念については、以下の著書を参照。P・ブルデュー『構造と実践』（石崎晴巳訳）藤原書店 1991、同『ディスタンクシオン』（石井洋二郎）1・2 藤原書店 1990。また、

宗教的知識の政治社会学的分析については、Pierre Bourdieu, “Genesis and Structure of the Religious Field”, *Comparative Social Research* 13, 1991, pp.1-44 を参照。

- 33) ここで詳細に論じることはできないが、「霊能のインフレーション」は、分派形成を促進することにもつながる。たとえば、多くの分派を生んだことで知られる新宗教、世界救世教の場合、浄霊という秘儀の開示が急速に進められたため、霊能のインフレーションがおこり、それが分派発生をも促進することになったといえる。岩井「宗教経営学からみた世界救世教」参照。また、カトリック世界における奇跡の認定というシステムは、「霊能のインフレーション」と同じ文脈で分析できる。つまり、〈世界規模での奇跡の発生→奇跡のインフレーション→奇跡の認定によるインフレーションの抑制〉という図式である。岩井 前掲書 82-88頁 参照。
- 34) 川端亮「教団の発展と霊能者」(新宗教のネットワーク：真如苑・現在の霊能) 宗教社会学の会編『宗教ネットワーク：民俗宗教、新宗教、華僑、在日コリアン』行路社 1995 138-157頁。なお、秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティ：社会学，真如苑に入る』新曜社 2004 も参照。
- 35) 「秘密のマネジメント」という観点からすると、「秘密の発明あるいは捏造」についてもふれておく必要がある。秘密の中身について、もし一般信者が知りえないのであれば、「秘密が存在する」というリアリティさえ確保できれば、秘密の中身はいくらでも作り出すことが可能である。たとえば、ユダヤ教におけるミシュナ(口伝律法)の登場などは、その好例である。文字化されたトーラー(律法)における戒律が、時代とともに現実に適合しなくなったとき、秘密裏に口伝されてきた、もうひとつの律法があるという言説が生まれ、ミシュナが「発明」された。これは、戒律の内容を現実に適合させようとする、聖職者たちの戦略であったと解釈できる。「秘密の発明あるいは捏造」という発想については、E・ホブズボーム&T・レンジャー編『創られた伝統』(前川啓治・梶原景昭訳) 紀伊國屋書店 1992 が参考になる。
- 36) 井上順孝「情報化時代と宗教のグローバル化」國學院大學日本文化研究所編『グローバル化と民族文化』新書館 147頁
- 37) 同論文
- 38) Jon Atack, *A Piece of Blue Sky: Scientology, Dianetics and L. Ron Hubbard Exposed* .
(<http://www-2.cs.cmu.edu/dst/Library/Shelf/attack/>)
Jon Atack “OT III - Scientology’s “secret” course rewritten for beginners”
(http://www.xs4all.nl/kspaink/cos/essays/attack_ot3.html)
裁判では、ウィルソン(Bryan R. Wilson)をはじめとする著名な宗教研究者が、宗教における秘密の位置づけに関して証言している。
- 39) 紀藤正樹「宗教事件の事例からみた、宗教サイトの求心力と遠心力」(「宗教と社会」学会「インターネットと宗教」プロジェクト研究会「インターネットがもたらす宗教的共同性への求心力と遠心力」発表レジュメ) 2003年3月10日。

Abstract

This is an essay on the management of religious system from the viewpoint of the knowledge management or the knowledge creation. In the beginning, to make clear my framework, I will introduce the theory of knowledge. Then, based on that, I will consider the knowledge sharing and creation from the viewpoint of theories on apprenticeship. Lastly, I will propose hypotheses on the role of secret in the religious system and the management of secret.